
戦乙女と踊れ

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦乙女と踊れ

【Nコード】

N43660

【作者名】

名無し

【あらすじ】

記憶喪失の幽霊アリシアと、鋼の肉体を持つ櫻井映が交差する時、物語は始まる。

*リリカルなのはSSの超難関、アリシア・テストロッサの救済を目指す二次創作です。生暖かい目で見守ってください。

プロローグ

櫻井映には特技がある。

映の特筆すべき性質と云えば、まず一番に挙げられるのは、身体の異常な打たれ強さである。

素肌に刃物を突き立てても掠り傷一つ負わず、三階のベランダから庭に落下しても打撲すらしない、まさに鋼の肉体とでも形容するしかない耐久性。

しかし、それは生まれながらの体質であって、映という人間が得意としている能力ではない。

櫻井映が隠し持つ特別な技とは、即ち 幽霊が見える事である。例えば、一年前に人身事故が起こった交差点では、映と同年くらいの半透明の少年が、毎日歩道を行ったり来たりする姿を見かける。映にだけ見え、彼の友人にはまったく見えないというその少年が、幽霊や靈魂の類である事を理解するのにあまり時間は掛からなかった。

映が発見した幽霊はそれだけに留まらない。物憂げに沈んだ眼差しで街頭を闊歩する女性の後ろを無邪気について回る子供の霊や、不調そうに顔を曇める男性の背中に負ぶさっている老女の霊、他にも枚挙に暇がないくらいに、映は幽霊というものを見慣れている。

幽霊に関わると不幸になる そんなことを、テレビ番組の怪談特集に出演していた、高名な霊媒師の女性が言っていたので、幽霊に話し掛けたり近づいたりする事こそ今までしなかったが、幽霊に

関わるとどんな事になるのか、興味がまったくない訳ではなかった。

だから、あの日。

映は彼女に話し掛けたのだ。

半透明で、足が宙に浮いてるその少女が、人間ではなく幽霊であるとは直ぐに察しがついた。

ある一カ所に留まっている地縛霊でもなく、ある個人に取り付いている憑依霊でもなく、周囲の人間に一切影響を及ぼさず、ただクラゲのようにふよふよと漂うだけの浮遊霊。

彼女がそれに区別される幽霊だったから、映は安心していたのだろう。

そして、何よりもその幽霊少女が物珍しかったのだ。

砂金を梳かしたような眩い金髪に、憂いを帯びた空ろ色の碧眼。

この海鳴市に住む外人など、下宿先の娘の友人の 随分と遠い関係である アリサ・バニングスくらいしか、映は知らなかった。

アリサの碧眼は常に力強い意志を表出して光り輝き、その金髪はまるで獅子の鬣のようである。

割と気弱な方である映の気性と、アリサの勝ち気な性分はあまりそりが合わず、彼は彼女の事を苦手に思っていた。

故に、映は外国人という単語を聞くと、真っ先にアリサの事を連想してしまうのだ。

映の中では、外人とは皆一様にライオンの如く気性の荒い人々だという、ある種差別的な固定概念が定着している。

そんな映の感覚と、幽霊少女の印象は相反している。

今にも空に溶けて消えてしまいそうな彼女の姿は、ライオンには程遠い。

初めて見る外国人の幽霊という要素も映の好奇心を大いに煽ったが、もしかしたら、彼はこの幽霊少女が秘めていた？摩訶不思議への招待状？に、本能的な部分で気付いていたのかも知れない。

或いは、余人には計り知れない天命のようなものに突き動かされていたのか。

兎に角、彼は好奇心に従って藪を突き、そこから現れた蛇と運命的な出逢いを果たしたのだ。

彼女との慣れ初めの言葉はこうだった。

「こんにちわ、今日は天気がいいね。ところで、君は何て名前なの？どこから来たの？」

人生で初めて幽霊に話し掛けるにしては、あまりにも間抜けな第一声であったが、事実その日は朝から雲一つ見当たらない日本晴れで、この上ないくらいの洗濯日和で、散歩日和で、とても天気が良かったのだ。

言い分は間違っていない。

概ね適確な挨拶の文句であると言える。

映に語り掛けられた少女は、虚空に彷徨わせていた視線をゆっくりと動かして、振り向く形で背後の少年を見た。

人形のように空っぽの表情が、

氷のような冷たい紺碧の瞳が、

向日葵のような微笑に変貌するなどとは、この時の映はまったく予

想だにしていなかった。

ニコリと弧を描いた少女の小さな口が動き、映の脳内に直接、可愛らしいソプラノの発音が響き渡る。

『本当に、今日は良いお天気だね。わたしの名前はアリシア。どこから来たのかは覚えてないの。あと、レディに名前を訊くときは、まず自分から名乗らないとダメなんだよ』

幽霊って喋れたのか。

幽霊少女との会話を経て映が抱いた感想は、やはり何処か間が抜けていた。

櫻井映とは月村家に居候する、月村すずかよりも一つ年上の少年の名前である。

生前のすずかの両親と友人だったと言う櫻井兼 映の父親である 直筆の紹介状と大金を持参した六歳の映が、自分の身の丈よりも大きく膨れあがったりリュックサックを背負って月村家を頼って来たのが四年前の話である。

兼がすずかの両親と、“一族”に関する秘密を共有するくらいに親しい付き合いをしていた頃、まだすずかは生まれていなかった。最初すずかは兼の息子を名乗る映がどういう身分の人間か判りかねていたが、兼と直接の面識があったらしい忍は映を賓客として月村家に出迎えた。

その際に、月村の一族の“訳”を知る者ならば答えられ、それを知らない者ならば答えられない重要な質問を、忍は映に対して行っているが、彼から返ってきた反応は子供らしい困惑の表情だった。

どうやら、兼は息子の映にも月村の一族に関する秘密を洩らす事はしなかつたらしい。

それを知ったすずかは安堵に胸を撫で下ろしたが、同時に落胆もした。

幼いすずかは心の何処かで、姉の忍にとっての高町恭也のような、自分の秘め隠された部分まで承知してくれる理解者のような存在を待ち望んでいたのだろう。

ところで、そんな櫻井映であるが、最近様子がおかしいのである。

確かに、映には前々から常人と一線を画すような変わった特徴があった。

まず、真つ先に挙げられるその特徴の一つが、肉体の異常な頑強さである。

三階のベランダから誤って転落した時も、おつちよこちよいなメイドに誤って果物ナイフを投げつけられた時も擦り傷一つ負わず、大型トラックに跳ね飛ばされた時も負傷は軽い打ち身とたんこぶだけで済んだ。

本人は気にも留めていないが、明らかに超人然とした、特殊能力として身分証にでも書かれていそうな 身分証に特殊能力など普通通記さないが 特徴である。

それに比べるとまったく大した特徴ではないが、映はよく遠くの何もない場所をぼつと眺めている事がある。

一度、何も無い空間をぼんやりと遠望する映に何を見ているのかとすずかは訊いてみた事がある。

映は少し驚いた表情で「すずかちゃんには見えないの？」と質問で返してきた。

その後、何が見えないのかと映に言及してはみたが、結局うやむやにはぐらかされてしまった。

そんな鋼の肉体を持ち、遠くをよく見つめている映であるが、二週間ほど前から奇行が目立つようになった。

よく独り言を口にするようになったのである。

食事などと言った家族全員が集まる場では慎んでいるようであるが、一人で廊下にいる時や、部屋に籠もっている時、映は密かに独り言を口走っている。

先々週の月曜日の話であるが、映に貸していた本を返してもらったために彼にあてがわれた部屋をさすが訪れた際、扉越しに映の一人語りが聞こえてきたのだ。

やれ「そんなに学校が珍しかった？」とか「アリサちゃんは気が強くて苦手だ」とか、まるで仲良くなった転校生の話し相手でもしているかのような台詞である。

しかし、さすがが映の自室に入ってみても、そこには映以外にめぼしい人影は見当たらない。

映の部屋には勉強机とベッドしか家具が置かれておらず、人間が身を隠せるようなスペースはない。

つまり、さすがの視覚が何らかの異常を来していて、映の傍に侍っていた彼の話し相手の姿を見逃した訳でもない限り、映はそれまで虚空に向かつて話し掛けていた事になる。

映に誰かと話していたのかと問い詰めても、彼はお茶を濁すばかりで真実を語るうとしなかった。

そして、極めつけの奇行が、映が自力で起床してくるようになった事だ。

この四年間、ノエルに起こしてもらえなければ、朝食の準備が整う定刻までに決して間に合わなかった映が、その定刻よりも数十分早くダイニングに現れるようになったのだ。

あのノエルでさえ穩便に起こすのに苦労するほど大寝坊助の映が、何の前触れもなく、いきなり早起きできるようになるなど、さすがたちにとっては正に青天の霹靂である。

映が自力で起床できるようになったのは非常に喜ばしい事ではあるものの、前述の独り言の件も相俟って、めでたさよりも心配が先立つてしまうのは無理からぬ事である。

そして、今日も。

定席に着き、忍は新聞を、すずかは小説を、それぞれ読みながら朝食が食卓に並ぶのを静かに待っていると、何食わぬ顔をした映がダイニングにやって来たのだった。

朝食の定刻よりも四十三分早い起床であった。

布団には魔性の力が宿っている。

それは目に見えない魔力の枷となって起床しようと努力する映の体を雁字搦めに拘束し、ベッドに固く束縛するのである。

その枷はダイヤモンドよりも頑強で、ゴムのように柔軟性に富み、映がどれほど抗おうとも解く事ができない。

家長の忍に寝坊の原因を追及されると、映はそのような事を生真面目な顔で嘯くのだ。

忍の目の前で自分が如何に布団と激しく戦ったのか、その武勇伝の終始を熱弁する映に、忍は呆れを通り越して最早笑う事しかできなかった。

その時、忍たちは映の言葉を言い訳の虚言として捉えていたが、実際映は毎朝、彼を起床させまいと妨害してくる布団と何十分にも渡って死闘を繰り広げているのである。

映は大真面目だった。

そして、今日も。

映は彼を眠りの底へ誘おうと手を招く布団の魔力と、懸命に戦っている。

誰が何と言おうとも、映は布団と確かに戦っているのだった。

『うーっーるー！ あーさーだーよー！』

「……………う、ーん。……………あと、五分だけ」

故に、脳内にきんきんと反響する少女の声を鬱陶しく思うのも、つい口について甘えの言葉が漏れてしまうのも、布団の悪辣な畏なのである。

『うーっーるー！ 忍さんやずかちゃんもきつと待ってるよー！』

映は今すぐにでも起床し、ダイニングで待っている忍とずかの元に駆け付けたい。

「もうちょっと……………」

「あと五分……………」

これらの言葉は映の本心ではなく、布団が彼の精神をマインドコントロールし、彼に無理矢理言わせているものだ。

映は、絶対に二度寝をしたいなどと思っていない。

思っていないのだ。

『うーっーるー！？ これ以上ーじょーを決め込むなら、わたしにも考えがあるんだよー！』

「……………うむう、あと……………五日、」

身を包む布団の温もりを愛おしいなどは、まったく思っていない。羽毛布団の柔らかな触り心地が恋しいなども、まったく思っていない。

全ては、妖しげな魔力を操り、人心を掌握する魔具、布団の巧妙な工作なのである。

覚醒しかかっていた意識が、ゆっくりと再び闇の中に沈んでいく。開きかかっていた瞼が、重く閉ざされていく。

此度の戦いは、布団の奸計に陥った映の敗北に終わるものと思われた、その時。

『いい加減にしなさい!!』

少女の一際大きな怒声と共に、獲物に襲い掛かるアナコンダの如く映を簀巻きにしていた掛け布団が剥ぎ取られ、彼は突然の浮遊感に見舞われる。

背筋を氷の針でなぞられるような独特の感覚は、微睡みに嵌っていた映の意識を明瞭にするためには、この上ない程の適薬だったに違いない。

そして、落下。

映は冷たい石造りの床に体ごと叩きつけられて、完全に目を醒ました。

そう、映は布団の魔力に打ち勝ち、その手で勝利を掴み取ったのである。

ジーク・ハイル・ヴィクトーリア。

「……………アリシア少尉、ご苦労。君の御陰で私は永年の宿敵、布団を見事打ち倒す事ができた。君がいなければこの勝利は有り得なか

つただろう。これで、君には感謝してもし足りない程の恩ができてしまったな。 ありがとう」

口調が軍事風になっているのは、恐らく昨夜映が遅くまで読んでいた小説、『戦場の結束・下』の影響に違いない。

すずかに勧められて読み始めた本で、すずか曰く「友情の素晴らしさ、戦争の酷さを同時に学習できる」という優秀な教材であるらしい。

主人公の親友・栄一郎が「俺、この戦争が終わったら結婚するんだ……」と独白した直後、眉間を銃で撃たれて死亡する場面が一番印象に残っている。

このシーンを読んで、なるほど戦争とは未恐ろしいものだと思は痛感した。

そんな調子の映を、宙に足を浮かせた幽霊少女、アリシアは呆れた様子で眺めていた。

『わたし、少尉なんかじゃないもん……。それに、何が永年の宿敵なの？ ただ映が二度寝しようとしてただけじゃない。あと、わたし、毎朝こんな風に映を起こしてるよ？ 昨日もわたしは感謝してもし足りないくらいの恩を、映に着せたんだよね？』

先程、映はベッドから床に自然落下したのではない。

このアリシアによってベッドから持ち上げられた後、床に思い切り投げ落とされたのである。

しかし、アリシアの外見年齢はせいぜい五歳前後、その細腕では十歳の少年とは言え、男一人を持ち上げるのは無理がある。

そもそも、アリシアは幽霊だ。

肉体を持たない彼女は物質に接触する事ができない。

だが、アリシアは幽霊は幽霊でも、幽霊の中ではずば抜けて優秀な幽霊だったらしい。

アリシアは物に触れられずとも、強く念じるだけで物を動かす事ができる。

アリシアは浮遊霊ではなく、騒霊の類だったのである。

普通の人間からすれば、念じるだけで物体に運動エネルギーを加えられるアリシアのポルターガイストは大いなる脅威だが、映はアリシアの正体が騒霊だと発覚しても動じたり取り乱したりする事はしなかった。

気性は弱い、マイペースな性格の映からすれば、浮遊霊も騒霊も似たようなものである。

特に思うところはなく、アリシアの接し方にも恐怖は感じられない。アリシアもアリシアで、そんな映の態度を好意的に思っており、その持ち前のポルターガイストを使って、毎朝映を甲斐甲斐しく起こしてやっている。

その方法こそ少々荒っぽい、人一倍頑丈な体質の映にはこれくらいで丁度良かった。

これが、映の、とびつきりの奇行の真相であった。

「違うよ、アリシア。それは誤解だ。僕は二度寝をしようなんてこれっぽっちも思っていないのに、いつも布団が僕に悪い魔法を掛けて眠らせようとするんだ。僕の本心に関わらず、だ。どうやら、君には僕がどれほど長い間布団と戦ってきたのか、その血と涙の戦歴の全てを教えなければいけないようだね」

『そんな御伽話よりも欠伸が出そうな英雄譚なんて、絶対に聞きたくないよ……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4366o/>

戦乙女と踊れ

2010年11月9日18時20分発行